

簡単に分かる古事記の読み方

永山 誠

第1. 「天皇の歴史」には2つの流れがある

▽話題の発端—三島由紀夫の「檄」—

21世紀日本の「行政側の福祉」は解釈改憲というか、なし崩し的に憲法25条にもとづく生存権＝「権利としての社会福祉」を縮小・変質させ、福祉とは「社会的アノミーを抑止する新たな価値体系にもとづく社会秩序の確立」をめざすことと再定義されました。

「社会的アノミーを抑止する新たな価値体系」とは<古事記(712)のミソギ・ハライの思想にもとづく社会秩序の確立>のことと『福祉の深層海流』(アネスト出版2022アマゾン)ではじめて私は指摘しました。

このところの話題は「天皇を中心とする日本の歴史・文化・伝統」というフレーズですが、これは三島由紀夫が割腹自殺する直前、1970年11月付で書いた「檄」の「日本の軍隊の本義とは天皇を中心とする日本の歴史・文化・伝統を守ること」と出所は同じだと思います。いうまでもなくこれは21世紀の福祉文化問題の核心にふれる問題です。

古事記というと「作り話だから…」と多くの方々には話題の入り口でこれを拒絶します。「批判するなら読んでから」とおもうのですが世間はそういかない。21世紀の「行政側の福祉」を考えるには<歴史としての古事記>を理解しておくことが必要です。これにどう対応したらよいかを今回、考えました。そこで私なりの古事記の読み方を紹介します。

▽古事記の編纂と元明天皇に献上された秘密本

古事記は、稗田阿礼(1970-80年代の研究で藤原不比等の筆名とするのが定説です)が日本語で語った物語(ストーリー)を、太安万侶が漢字を使い日本文に翻訳したのが古事記です(太安万侶の古事記「序」)。古事記は712年に元明天皇(太安万侶の叔母、在位707-715)に献上されます。古事記は上記<3者の秘密文書>とされて他に伏せられ、室町期に表に広まったという。

藤原不比等の古事記は、天之御中主神(あめのみなかのぬしのかみ)に始まる神々の系譜から<ミソギを受けて女帝・アマテラスが誕生>し、ここから「天皇の歴史」の物語が始まる、という神話です。

▽二つの古事記編纂事業—「原・古事記」と「現・古事記」

古事記の編纂は二つの段階があります。まず、壬申の乱で国家統一を果たした天武天皇の歴史観にしたがい「原・古事記」の編纂が始まり、天武天皇は天之御中主神に始まる

神々の系譜から天皇家が生れたという考え方で、「天皇による国家統一の正統性」を示そうとしましたが、天武天皇の死（686）を機に藤原不比等は作業を中止します。

次の第二の段階は元明天皇が711（和銅4）年、太安万侶（元明天皇は叔母）に古事記編纂を命じ再開されます。太安万侶の古事記「序」によると編纂作業は<ミソギを受けたアマテラスを皇祖神とする「天皇の歴史」>は「稗田阿礼＝藤原不比等」が語り、太安万侶はこれを記録する役割分担で成りました。ポイントは編纂者＝太安万侶は<アマテラスに始まる「天皇の歴史」神話の創作>には関与せず、と一線を画した点です。

壬申の乱で国家統一を果たした天武天皇の政治目標は、天智・天武系の子どもたちが律令制にもとづき協力し合う<皇親政治>の実現でした。そして古事記編纂により、天皇による国家統一の正統性を示す予定でしたが、作業は藤原不比等によって中断します。

中断した25年間のできごとは、天智の皇子4名、天武の皇子10人、合計14人のうち、8歳で死んだ1人、壬申の乱で死んだ1人、死亡年月日不明の磯城皇子の3名を除く11人はみな暗殺、毒杯、自殺等で消え、政情は<恐怖と不安>に包まれます。この連続死こそ、藤原不比等が天皇家を取り込む絶好の環境をもたらし、「追い風」となります。

▽第二段階「現-古事記」の新たな神話の創造

第二段階の古事記編纂事業は天武の死から25年後、元明天皇の命で711（和銅4）年に再開されます。「現-古事記」は「稗田阿礼＝藤原不比等」が創作した<ミソギを受けたアマテラスを皇祖神とする「天皇の歴史」>です。この歴史は天武天皇の目指した律令制下の<皇親政治>の阻止、<「皇親排除＝女系皇統化」＋藤原不比等>軸の律令政治の実現です。「皇親排除＝女系皇統化」の“決め球”は藤原不比等が後宮のボス・橘三千代を寝取り我が妻としたうえで、これを利用し皇族から「皇后は皇族からという古くからの皇后柵立権」を奪った秘密戦にあります。これで「皇権の抑圧で…天皇家は聖武以来衰微し、藤原家が（天皇家に：永山）にとって代わった」（梅原猛著作集⑤314-315頁）。

さらに藤原不比等は皇祖神を祭る伊勢神宮に入り込み、アマテラスとともに相殿に鎮座（古事記の「天孫降臨」の項）し、今日に至ります。これは<日本の歴史上最大の政治的スキャンダル>です。

太安万侶は藤原不比等の「アマテラスに始まる天皇の歴史」の共同創作者（梅原猛説）とされますが、これは誤認でしょう。太安万侶は古事記の「宇遲能和紀郎子（うじのわきのいらつこ）」の項で、応神天皇を「品陀和気命」と表記し、太安万侶の父・多臣品治を<品陀別気命＝応神天皇の眷属神>として712年に宇佐神宮の鷹居社に天降してこれを祭り、「八幡神＝応神天皇」の構図ができます。神道は自然を神とする天神地祇でしたが、「はじめて天皇が人格神として祭られます」（中野幡能編著『八幡信仰辞典』48頁）。

*太安万侶＝多氏は690年代後半から700年初頭、藤原不比等の天皇家乗っ取りの謀略を見抜き、「品陀別気命＝応神天皇＝多臣品治」を宇佐神宮に祭る戦略を固めます。古事記献上の712年、宇佐神宮の鷹居社に応神天皇（品陀別気命＝矢作氏）が天降りますが、

これは太安万侶によるシナリオ（永山誠説）です。天武天皇の<天之御中主神（北辰神）>にもとづく「天皇を中心とした歴史」>は伊勢神宮ではなく、天武天皇の「天皇の歴史」観は唯一、宇佐神宮で継承されます。

「八幡神=応神天皇」の思想は不勉強のため私は知らないのですが、桓武天皇が「八幡神=応神天皇」に奉った「尊号」は「護国靈驗威力神通大菩薩」（781）で、「弥勒菩薩や観音菩薩の力をかりるのではなく、自らがそれらの靈驗をあわせもちなおかつ鎮護国家をつかさどる菩薩」です。小椋山に還幸したおり、この尊号に「自在王」が追加され最終的に「護国靈驗威力神通大自在王菩薩」となりました。

尊号の解釈は、「如来を志向しない菩薩、すなわち成仏することを断念して永遠に菩薩を続けようとする菩薩のことです。…つまり八幡大菩薩=応神天皇の神靈は永遠に天皇・国家・人民を守るという修行を続けていくのであって、そうして釈迦入滅から56億7000万年後に出現するといわれる弥勒菩薩を待つ」という趣旨です。

（中野幡能、前掲86-86頁。尊号解釈は『悠久』3号所収、西田長男）。

宇佐神宮は伊勢神宮とともにやがて皇祖神を祭る「二所宗廟」となります。二所です。一つということです。ただし設立経過をみると「対立する側面」もあります。

たとえば藤原不比等の「現・古事記」の哲学は<ミソギ・ハライの思想>で<支配・従属関係の思想=中臣神道>になります。そしてこの中臣神道は律令独裁を担保する国家哲学になる。他方、宇佐神宮の「八幡神=応神天皇」は「天皇・国家・人民を守る」鎮護国家をつかさどる菩薩で、しかも「如来を志向しない菩薩」ですから、仏教色のつよい内省的思想といえそうです。

歴史的にみると半島の新羅遠征を行った神功皇后とともにあった応神天皇、そして天武天皇の品治部（ほむちべ）として壬申の乱では最新鋭の騎馬軍団を率いこれを勝利に導くとともに天武天皇のもとで「古代矢作氏の始祖（矢作連の氏上）」となった多臣品治の両者は、本質的に<軍神>です。「八幡神=応神天皇（品陀和気命+品陀別気命）=軍神」の図式で考えれば、宇佐神宮の道鏡皇位事件（769）のとき、伊勢神宮そっちのけで朝廷が宇佐神宮に釘付けになった理由も理解できます。

桓武天皇（781-806）が「八幡神=応神天皇」の「尊号」に込めた意味は、即、多氏=太安万侶の考え方と同じだとはおもえませんが、律令国家を定着させる奈良・平安時代ですから時代に即した「尊号」を奉ったといえます。とはいえ「八幡神=応神天皇」は、藤原不比等の<支配・従属の思想=ミソギ・ハライの思想>に対比した場合、<抵抗の思想>を内に秘めていることは明らかです。

以上から「天皇を中心とした歴史」には、天武天皇の<天之御中主神（北極星=北辰神）>に始まる「天皇を中心とした歴史」（原・古事記）>と、これに対抗する藤原不比等の<ミソギを受けたアマテラスに始まる「天皇を中心とする歴史」（現・古事記）>の二つの系譜があることが判明するのです。

第2. 古事記にある「天皇政治」の二つの「型（タイプ）」

古事記はいろいろな読み方ができるので面白い文献です。藤原不比等の創作した「天皇を中心とした歴史」を「政治の形」という視点から読むと、二つの「政治の型」が存在することが示唆されます。

古事記の「東征」の「妻問い」の項にある1節に、神武天皇の2男・神八井耳命（かむやいみのみこと）は弟の3男にゆずり、第2代綏靖（すいぜい）帝が即位する話があります。ここで神八井耳命は「わたしは、あなた（3男の弟・綏靖帝：永山）を助けて、祭事をつかさどる忌人（いわいびと）となってお使いもうしあげよう」と述べ、「意富臣（おのおみ）小子部連、〔その他17氏族〕の祖先となった」のです。

「神八井耳命＝多氏（おおうじ）」は帝位を弟にゆずり、新たに<天皇（政治）を側面から援助する多氏（祭事をつかさどる忌人）>になるべく皇別氏族を立ち上げ、多神社に神武天皇を祭ります。綏靖天皇の「政治の型」は<天皇（政治）＋多氏（祭事）>を軸とする政治体制になります。この<天皇＋多氏>軸の天皇政治こそ、天武天皇が目指した<皇親政治>の原型だと私は考えています。以上が古事記の記述から読み取れます。

他方、古事記の「天孫降臨」の部分を読むと<天皇＋多氏>軸は抹消され、<アマテラス（鏡）＋オモイカネ（藤原不比等の分身：内大臣）>軸の天皇政治に組み替えられていることがわかります。古事記によると藤原不比等の政治目標は<女系天皇＋オモイカネ（藤原不比等）>軸の<律令体制>で、天武天皇の律令制にもとづく皇親政治（天智・天武の皇親中心の政権）の確立を阻止し、藤原不比等がこれに乗っ取る内容です。

古事記に記された<アマテラスの仮面をつけたオモイカネ（藤原不比等）>が皇祖神となる構想は<日本の歴史上最大の<静かなるクーデター計画>です。胎内に入り込み、最終的に肉体と神経系統を支配（国家の丸呑み）する<エイリアン戦法>といえます。

* <エイリアン戦法>の第1弾は、中臣（藤原）鎌足が常陸国鹿島神宮の大宮司職についてから奈良の小治田臣（＝多氏）にのぼり、皇太子・天智の参謀となる経過にある。

中臣（藤原）鎌足、藤原不比等親子2代にわたり活用した<エイリアン戦法>は、すでに指摘しましたが、1974年の日本経済調査協議会『福祉とは何か』を<初形初義>とする戦後保守勢力の「21世紀戦略」と酷似し”瓜二つ“であることは注目すべき事実です。

それはともあれ私の疑問は、<アマテラスの仮面をつけたオモイカネ（藤原不比等）>も「天皇を中心とする歴史・文化・伝統」の一つに入るのかどうかです。これは“天武天皇に叱られる”話ではないかと私はおもうのです。

第3. 伊勢神宮が祭る皇祖神はアマテラス＋α

古事記の「天孫降臨」の項（梅原訳「古事記」）に以下の一節があります。

- (1) 「『この鏡は、もっぱら私の魂として、私自身を拝するようにお祭りするがよい』とおっしゃり、つぎに、思金神には、『わたしの神事をよく行って、政治をなさい』とお命じになった。鏡を御神体とする天照大御神と思金神は、裂釧（さくくしろ）の五十鈴の宮にお祭りしている神である。」

（梅原猛著作集⑧『神々の流竄』419頁）

次に三浦佑之『口語訳古事記』の場合は、アマテラスとオモイカネの2柱をサルタヒコとアメノウズメの2柱に読み替えて訳しています。

- (2) 「『この鏡はひとえにわが御霊（みたま）として、わが前に額づくがごとくに祈り祀りたまえ』と仰せになり、つぎに、『オモイカネは、この鏡を祀ることを司り、祭りを執り行いなさい』と仰せになった。

それで、この二柱の神であるサルタヒコとアメノウズメは、今も、さくくしろ五十鈴の宮を祝い祀っておる。（下線：永山）」

（三浦佑之『口語訳 古事記〔神代篇〕』文春文庫2012、168頁）

三浦訳は2006-2012年で累計20万部を売っていますから、国民の意識は三浦訳でひとつの塊をなしているのではないか。TVを含むマスメディアも＜アマテラスの仮面をかぶった藤原不比等＞の天皇一色です。三浦訳を読むと「この二柱の神」は「どの神を指すかについては諸説があって定説はない」とし、アマテラスとオモイカネの2柱の学説をあえて示さず、藤原不比等の政治的意図を伏せる注釈になっています。

江戸時代の国学者・本居宣長（1730-1801）は、古事記の注釈書『古事記伝』で「この二柱とは、大御神の御魂実（みたましろ）の御鏡と、思金神の御魂実（みたましろ）とを指して申せり」と断言します。「五十鈴の宮＝伊勢神宮」に祭られている神は「鏡＝アマテラス」と「オモイカネ＝藤原不比等」の2柱以外にありえないという。

さらに梅原猛の場合は、伊勢神宮の2柱を以下のように解釈します。

「オモイカネノカミは、朝夕天皇に奉仕して政治を行うのである。官位でいえば内大臣にあたるだろう。藤原氏が権力の座につくためにもっとも好都合な地位としたところである。このオモイカネがアマテラスと共に伊須受能宮（いすずのみや）に祭られている。」（梅原猛著作集⑧「神々の流竄」271頁）

梅原猛はさらに、

「伊勢神宮には、アマテラスが、内大臣のオモイカネと仲良く鎮座していることになる。ちょうど春日神社にはアメノコヤネが、伊勢から来たヒメカミと仲良く祭られているように。」（梅原、前掲⑧、272頁）

*春日神社は藤原不比等の祖先神とされるアメノコヤネを祭る神社ですが、ここに伊勢神宮からつれてきたアマテラスが祭られている。平たくいえば天皇家のアマテラスはアメノコヤネ＝藤原不比等家に嫁入りした形になる。

論争はあるのですが、以上から伊勢神宮の相殿には皇祖神としてアマテラスとオモイカネの2柱が祭られていると考えてよいでしょう。

まとめ

▽伊勢神宮の皇祖神・アマテラスを従える藤原不比等

「天皇を中心とする日本の歴史・文化・伝統を守る」という言葉は古事記に依拠する限り、伊勢神宮に祭られているのは<「アマテラス（鏡）＋オモイカネ（藤原不比等）の2柱」を皇祖神とする「日本の歴史・文化・伝統」>に特定されます。古事記の哲学は<ミソギ・ハライの思想>ですから男女は主と従の関係になる。「アマテラス＋オモイカネ（藤原不比等）の2柱」は、オモイカネ（藤原不比等）が「主」で、女神アマテラスはこれに「従う」者です。天皇家は藤原不比等家に従うのです。

逆に古事記には<伊勢神宮の皇祖神・アマテラスを中心とする「日本の歴史・文化・伝統」>とする文言はない。したがって<藤原不比等隠し>は古事記献上後、日本書紀以降に誰かの創作＝偽造によって成立した可能性があります。

▽アマテラスの仮面をつけたオモイカネの律令国家

<伊勢神宮に祭られえた皇祖神・アマテラスを中心とする日本の歴史・文化・伝統>という<藤原不比等隠し>のフレーズは結局のところ<アマテラスの仮面をつけたオモイカネ（藤原不比等）の律令独裁>のことで、これをブルーシートで覆い隠す修辞法のようなものです。しかし古事記の伊勢神宮に祭られた皇祖神の2柱（アマテラス（鏡）＋オモイカネ（藤原不比等）は<藤原不比等隠し>の細工をしたとしても、江戸時代の国学者・本居宣（1730-1801）によって厳しく避けられた謬論であることは免れません。

▽天智天皇か、藤原不比等か一天皇家の正統な継承者とは？

「天皇を中心とする日本の歴史・文化・伝統を守る」ということばを、私たちはどのように理解すればよいのでしょうか。これを改めて問うことになります。

古事記にもとづけば、天武天皇の<天之御中主神に始まる神々の系譜から天皇家が生まれたという「天皇を中心とした歴史」(原-古事記)>か、藤原不比等の<ミソギを受けた皇祖神・アマテラス＋αの「天皇を中心とした歴史」(現-古事記)>か。いずれの選択肢が正統な「天皇を中心とした歴史」か、です。私たちが21世紀において改めて古事記を検討する理由は、やがてこの問題が「21世紀日本の文化問題」の中心的論点になるときがくるからです。

(了)